

抱っこひも等に関するアンケート調査結果

【抱っこひも等の使用実態について】

- 抱っこ、おんぶ兼用の製品が多く使用されており、海外メーカー製品が半数以上を占める。
- 6割以上が抱っこひもを1個だけ使用しており、2個以上の使用は4割以下であった。
- 購入は「赤ちゃん用品専門店」が5割であり、ネット通販の利用も4割と多い。「お下がり、リサイクル品」の利用が1割ある。
- 購入の際に参考にしている情報は「友人・知人などの話」や「インターネットの口コミサイト」が多く、「店舗の展示商品」「販売員」を上回っている。
- 選択に優先した項目は「(子供の)安定性」「(保護者の)体への負担の小ささ」「おんぶや抱っこの着脱のしやすさ」が多く、また、「SGマークの有無」は下位にとどまった。
- 約7割が首据わり前の4か月未満から使用を開始しており、3割弱が新生児期から使用を開始している。
- 半数がほぼ毎日使用しており、「料理や掃除などの家事をする時」「自転車に乗る時」に使用すると回答が、それぞれ3割、2割あった。
- 約2割が母親と父親の両方で使用している。

【抱っこひも等の安全対策について】

- 取扱説明書の「注意事項」を「ほとんど読まずに使用」「取扱い説明書がついていなかった」が合わせて1割弱あった。また、「装着方法」は、取扱説明書だけでは分かりにくく、1割が説明動画など、他の方法で補って使っている。
- 製品本体の注意喚起表示については、「覚えていない」「表示はなかった」との回答が6割あった。
- 転落防止のために注意していることでは「着脱は安全な場所で行う」「前かがみになる時は手で支える」「着脱は低い姿勢で行う」などの回答はいずれも半数程度にとどまった。また、「片手を空けておく」は1割程度と少なかった。

【転落についての「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験について】

- 転落の「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」の経験は約14%だった。
- 「ヒヤリ・ハット」経験時の抱き方は「縦対面抱っこ」が最も多く過半数を占めた。一方、実際に転落した事例では「おんぶ」と「縦対面抱っこ」がそれぞれ同数で最も多く、合わせて7割以上であった。
- 「ヒヤリ・ハット」経験は、「おんぶ・抱っこをするところ」「降ろそうとするところ」「抱き方を変えようとしたとき」「子供がのけぞったり、動きだしたりしてしまった」「前かがみ等無理な姿勢をしたとき」が多かった。
- 原因は「保護者の不注意だった」という回答が多く、メーカー等に報告する例はきわめて少ない。

1. 事前アンケート調査

「抱っこひも等」の使用経験者を調査対象とするため、抱っこひも等の使用状況を調査する「事前アンケート」を行った。

(1) 事前アンケート調査の概要

ア 調査地域と調査対象者、有効回答数

東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に居住する、4歳以下の子供のいる、20歳以上の男女 3,696人

イ 調査方法

WEBを利用したインターネットアンケート調査

ウ 調査実施期間

平成26年8月12日（火）から8月14日（木）まで

(2) 調査結果

事前アンケートの回答者のうち、1歳から3歳の子供のいる、抱っこひも等の使用経験者を1,088人抽出した。

使用経験については以下のとおりで、「抱っこひも・おんぶひも（抱っこ、おんぶ）兼用」のタイプが73.9%と最も多い。次いで「抱っこひも（抱っこ専用）」39.2%、「既製品のスリング（布タイプ、メッシュタイプ）」26.5%となっている。

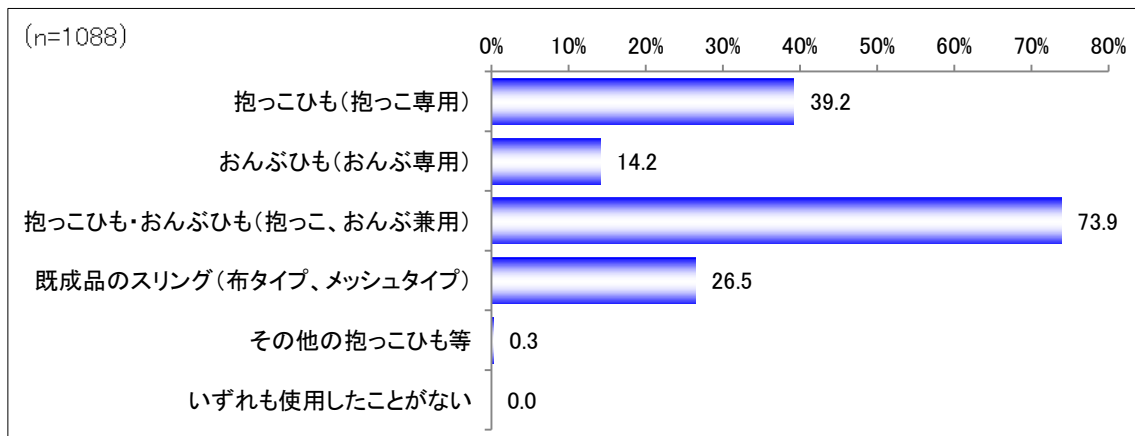


図 1 抱っこひも等の使用経験(複数回答)

2. 抱っこひも等に関するアンケート調査

事前アンケートで抱っこひも等を使用した経験があると回答した 1,088 人を対象に調査を行った。

(1) 調査の概要

ア 調査地域と調査対象者

東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に居住する 1 歳から 3 歳の子供のいる 20 歳以上の男女で、抱っこひも等を使用した経験があるもの 1,088 人

イ 調査方法

WEB を利用したインターネットアンケート調査

ウ 調査実施期間

平成 26 年 8 月 15 日（金）から 8 月 18 日（月）まで

(2) 調査結果

ア 抱っこひも等の使用実態について

(ア) 1 番よく使用している(していた)抱っこひも等のブランド及び抱き方

所有している(していた)抱っこひも等のうち、最もよく使用している(していた)抱っこひも等は、海外メーカー（C 社、D 社）の割合が全体の過半数を占める状況となっている。

また、その抱っこひも等がどのような抱き方ができるかについては、「縦対面抱っこ」76.0%が最も多く、次いで「おんぶ」45.0%、「前向き抱っこ」33.0%となっている。

なお、「スリング」については、図 1 のとおり 4 人に 1 人は使用経験があるものの、1 番よく使用している抱っこひも等としてスリングを挙げた回答者は 3%以下¹であったことから、一時期のみの使用であると推察される。

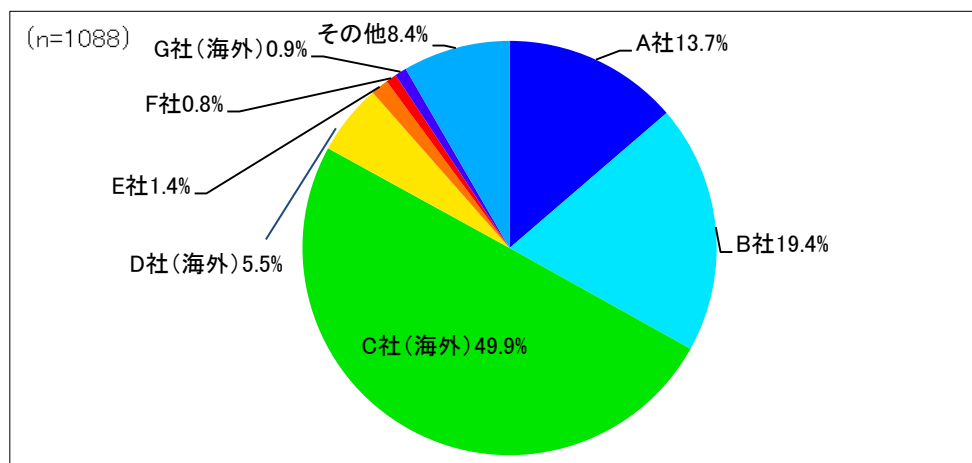


図 2 1 番よく使用している(していた)抱っこひも等のブランド(単数回答)

¹ 「その他」の回答者で、「スリングのメーカー名」または「手作りのスリング」「布」などとあったものが 32 件から求めた数字

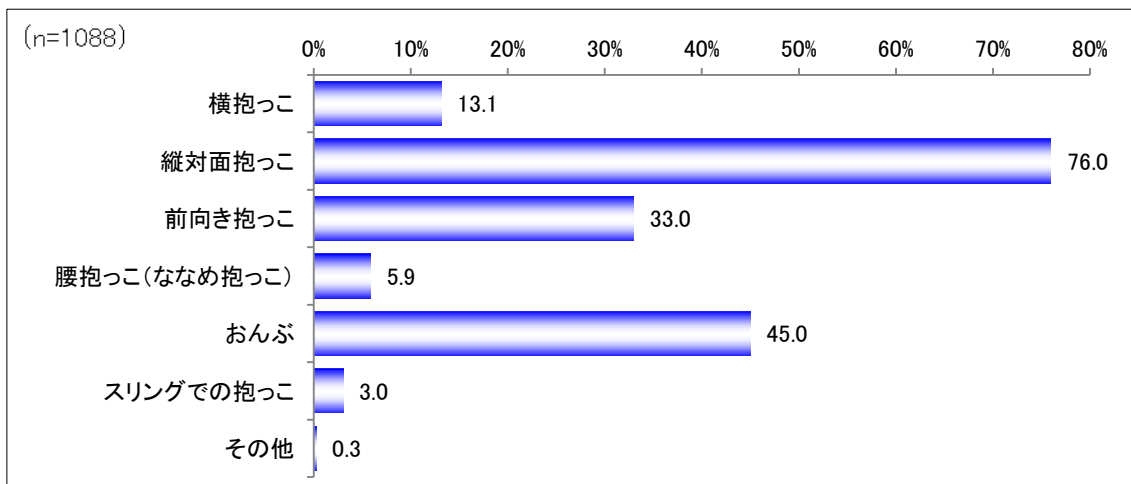


図 3 1番よく使用している(していた)抱っこひも等のできる抱き方(複数回答)

(イ) 2番目によく使用している(していた)抱っこひものブランド及び抱き方

6割以上が抱っこひもは1個しか所有していなかった。2個以上所有しているのは37.7%で、2番目によく使用している抱っこひも等は、「1番よく使用している抱っこひも等」に比べ海外メーカー(C社)の割合が少なくなっている。

また、その抱き方については、「1番よく使用している抱っこひも等」とほぼ同様の傾向となっている。

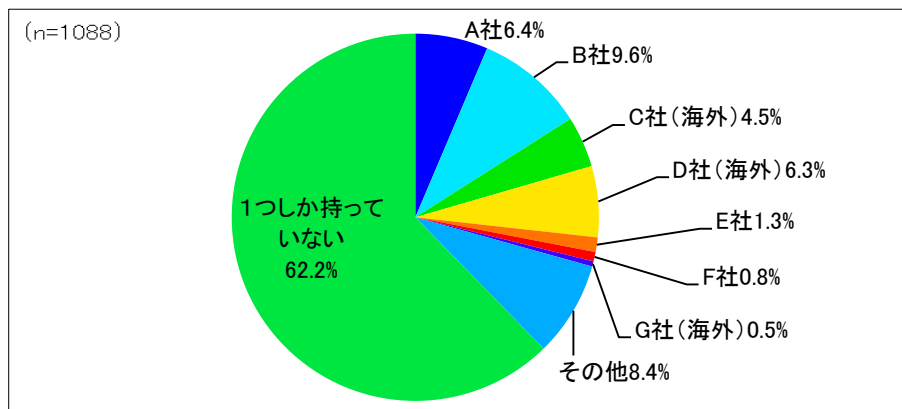


図 4 2番目によく使用している(していた)抱っこひも等のブランド(単数回答)

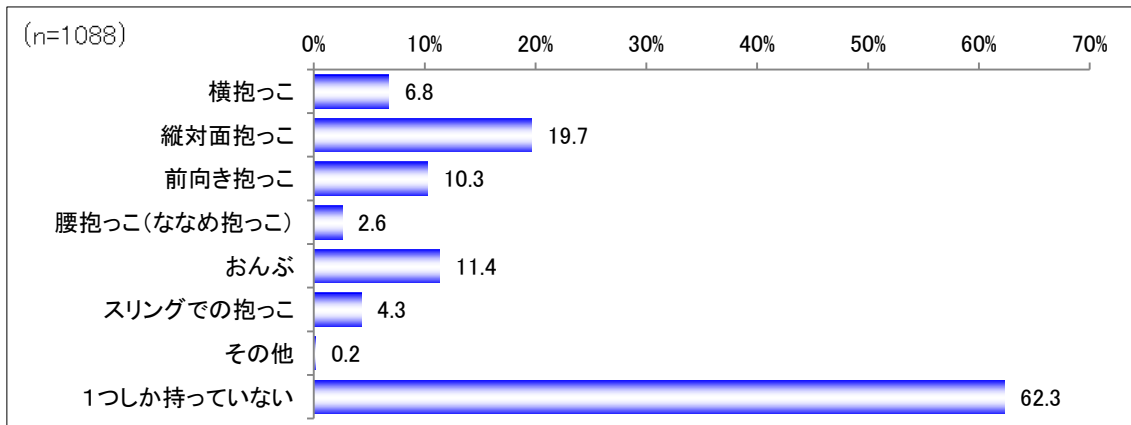


図 5 2番目によく使用している(していた)抱っこひも等のできる抱き方(複数回答)

(ウ) 選択時に参考にした情報

抱っこひも等を選ぶ際に参考にした情報については、「友人・知人などの話」の33.1%が最も多く、次いで「店頭での展示商品」30.7%、「インターネットの口コミサイト」23.4%の順となっている。

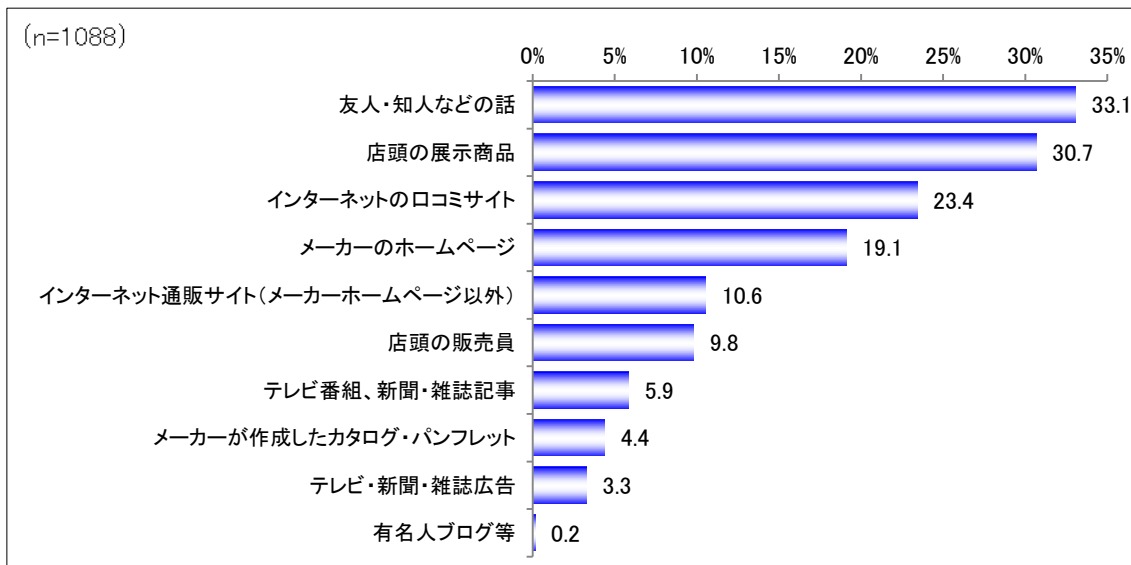


図 6 抱っこひも等の選択時に参考にした情報(複数回答)

(エ) 購入場所

購入場所は、「赤ちゃん用品専門店」が46.0%と最も多く、次いで「メーカー以外のサイトからのインターネット購入」27.2%、「メーカーのサイトからインターネットで購入」11.1%となっており、ネット通販の割合が4割程度となっている。

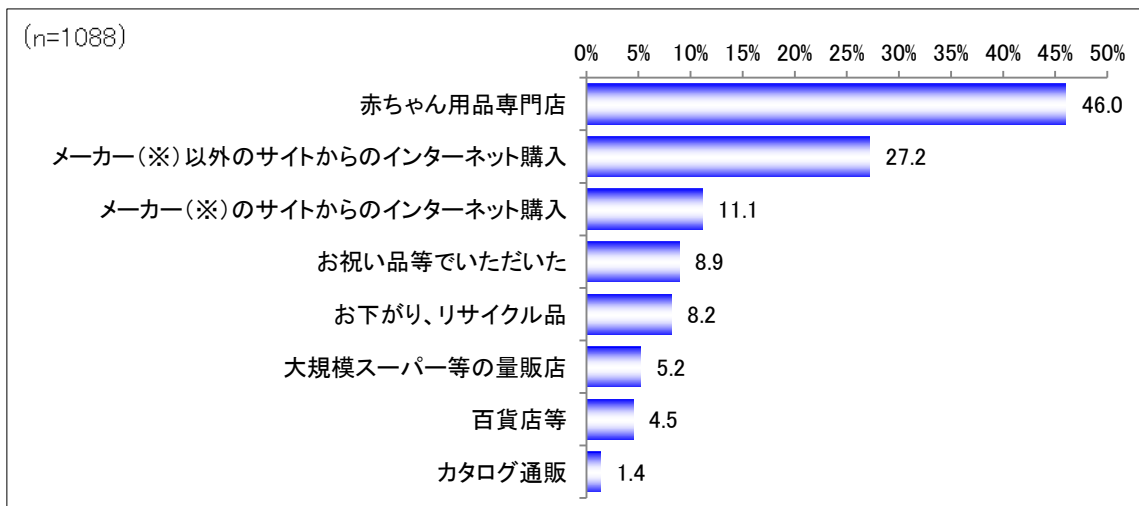


図 7 抱っこひも等の購入場所(複数回答)

(※) メーカーには、海外製品の正規販売代理店を含む。

(オ) 選択時に優先した項目

抱っこひも等を選ぶ際に優先した項目については、「(子供の)安定性」53.5%、「(保護者の)体への負担の小ささ」53.4%がほぼ同数で多い。次いで、「おんぶや抱っこの着脱のしやすさ」42.6%となっている。

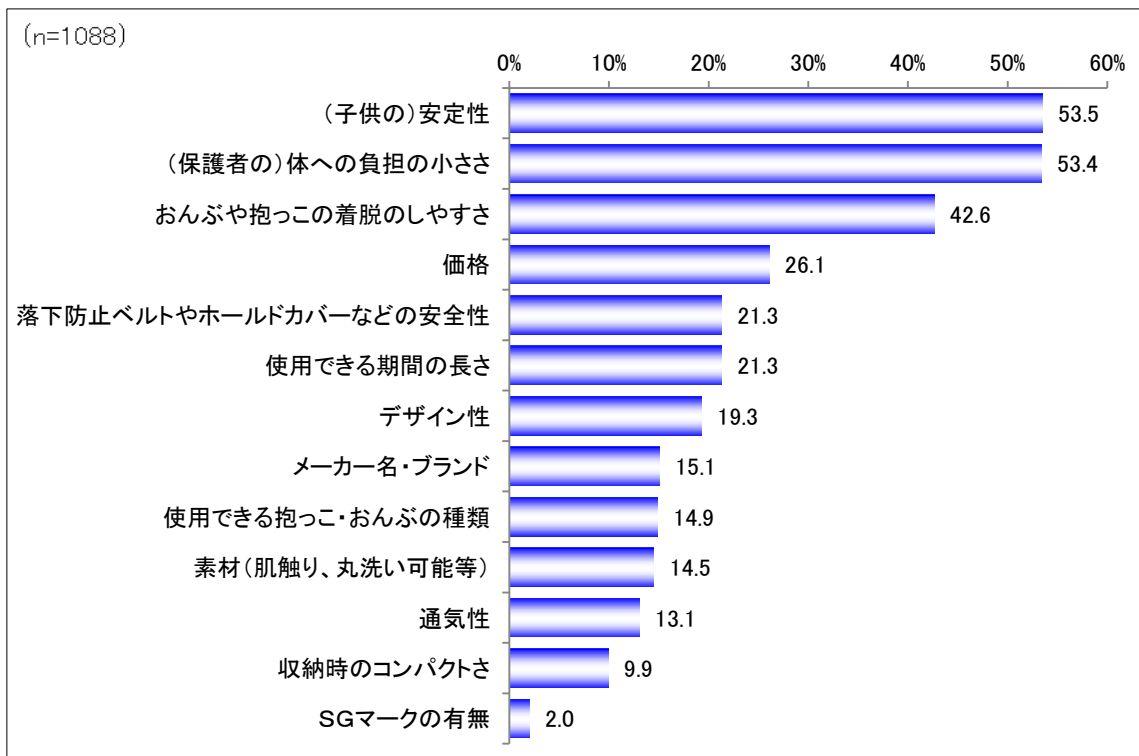


図 8 抱っこひも等の選択時に優先した項目(複数回答)

(カ) 使用開始時の子供の月齢

抱っこひも等を使い始めたときの子供の月齢は、「1 か月～3 か月」が 44.3%と最も多く、次いで「新生児（生後 1 か月未満）」26.7%となっており、7 割以上が首据わり前から使い始めていることがわかる。

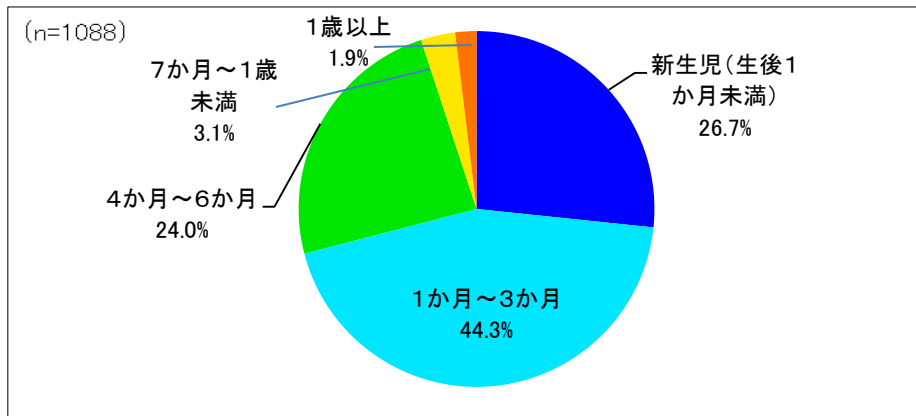


図 9 抱っこひも等の使用開始時の子供の月齢(単数回答)

(キ) 使用頻度

抱っこひも等の使用頻度については、「ほぼ毎日、外出時も自宅内でも使用している」が 24.5%、次いで「ほぼ毎日、外出時に使用」23.8%となっており、約半数がほぼ毎日使用している。

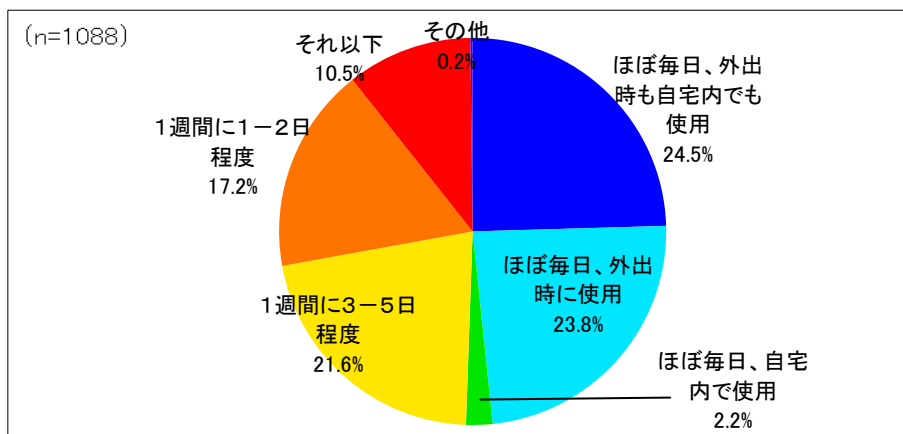


図 10 抱っこひも等の使用頻度(単数回答)

(ク) 使用場面

どのような時に抱っこひも等を使用するかについては、「1 人の子供を連れて歩く時」の 74.2%、次いで「バスや電車に乗る時」47.9%となっている。「自転車に乗る時」との回答も 19.0%あった²。「その他」では、「雨の日の外出時」「ぐずった時」などの回答があった。

² 東京都の道路交通法施行細則（公安委員会規則）では、抱っこひも等で確実に背負っている場合について、自転車の運転を認めている。（前抱きは不可）

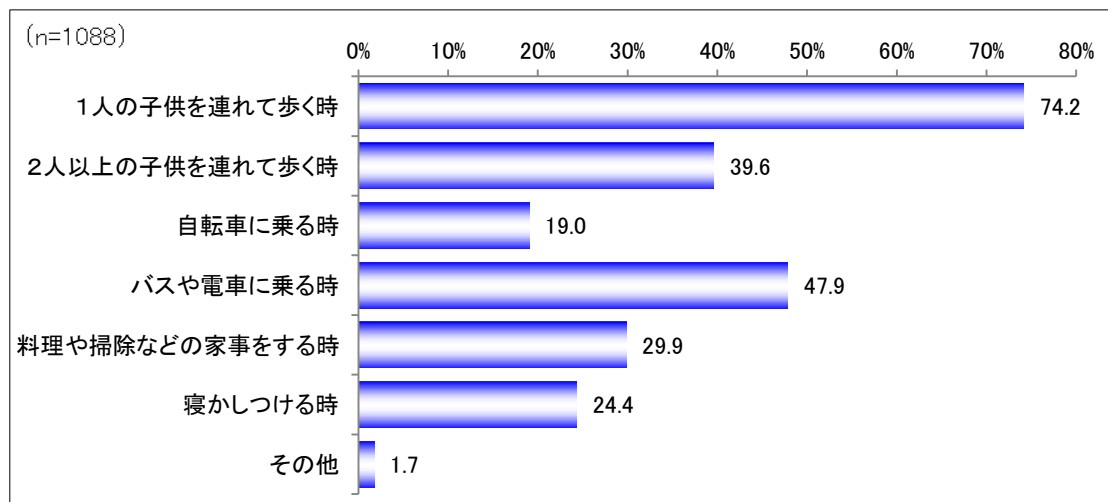


図 11 抱っこひも等の使用場面(複数回答)

(ケ) 着脱場所

抱っこひも等の着脱場所として多いところは、「自宅の屋内」74.9%、次いで「外出先の屋内」46.1%となっており、多くは屋内で着脱していることがわかる。

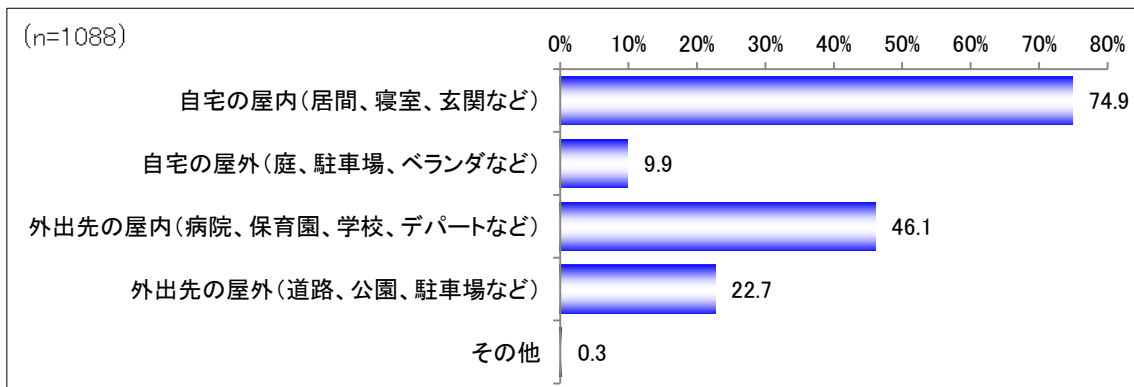


図 12 抱っこひも等の主な着脱場所(複数回答)

(コ) 主な使用者

抱っこひも等の主な使用者については、「主に母親」が 75.1%と圧倒的に多いが、「母親と父親と両方が使用する」との回答も 19.6%ある。

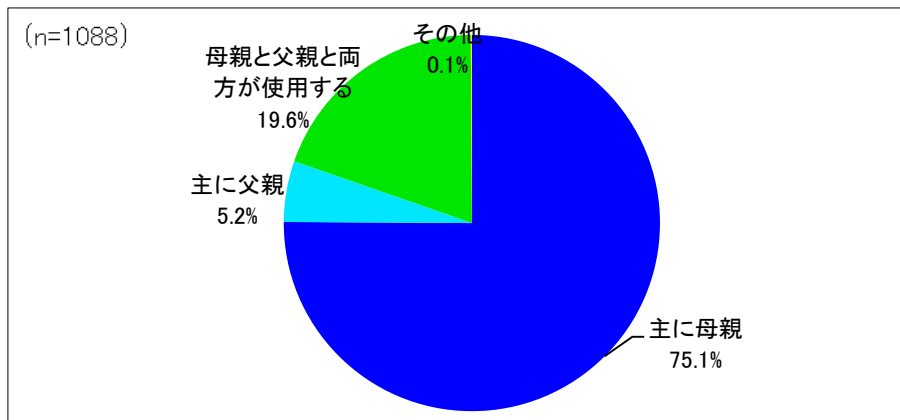


図 13 抱っこひも等の主な使用者(単数回答)

イ 抱っこひも等の安全対策について

(ア) 注意事項の確認

抱っこひも等を使用する前に取扱説明書の「ご使用前に」「安全の注意」などを確認したかについては、「取扱説明書の必要のところだけ読んだ」47.3%、「取扱説明書をよく読んだ」35.5%となっており、8割以上が取扱説明書を読んでいる。

「取扱説明書はついていたが、ほとんど読んでいない」(4.1%)の理由については、「読まなくてもわかると思った」「人から教えてもらった」「面倒だから」「説明書が英語だったから」などの回答があった。また、「取扱説明書がついていなかった」(2.9%)の理由については、「お下がり、中古品だったから」という回答が多かった。

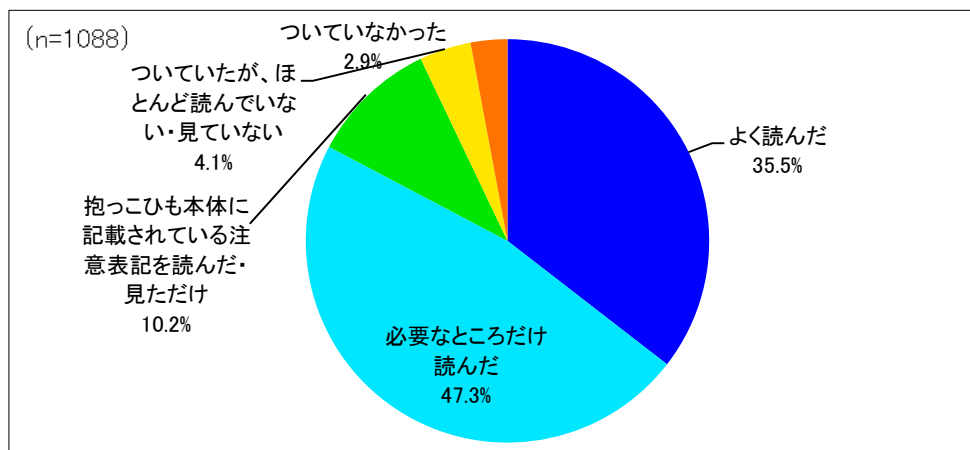


図 14 取扱説明書の注意事項の確認(単数回答)

(イ) 取扱説明書の「装着方法・おろし方」

取扱説明書の「装着方法・おろし方」などについて読んでいるかは、「取扱説明書を読み、すぐに使うことができた」44.2%、次いで「取扱説明書を何度か読んで、使うことができた」32.7%となっている。一方、「取扱説明書はついてしたが、読まずに使っている」7.9%と「取扱説明書がついていなかった」3.6%を合わせると11.5%が取扱説明書を読まずに使っていることが分かる。また、取扱説明書だけではわかりにくく、動画を見たり、販売員、知人に聞くなど他の方法で補って使えるようになったという回答が1割以上あった。

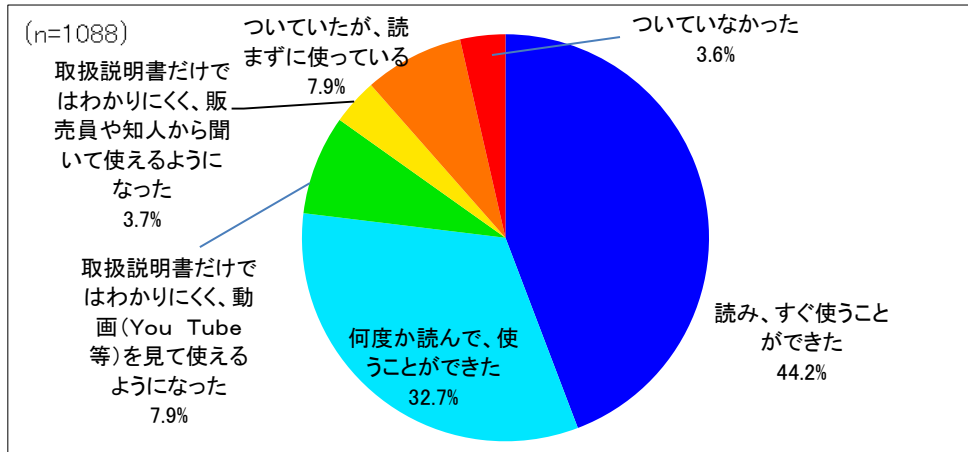


図 15 取扱説明書の「装着方法・おろし方」(単数回答)

(ウ) 抱っこひも等からの転落事故の認知

抱っこひも等から子供が転落する事故が発生していることの認知については、70.5%が「知っている」と回答している。

なお、この調査は、テレビ、新聞等で事故に関する情報が多く取り上げられた第1回の協議会終了後に実施したものである。

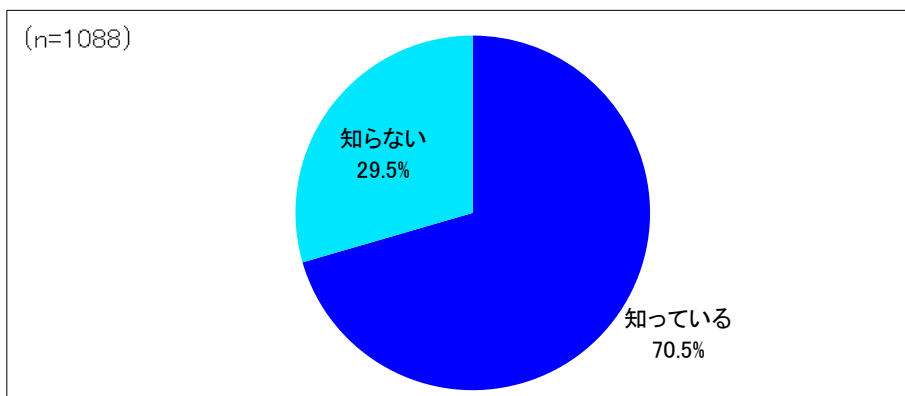


図 16 抱っこひも等からの転落事故の認知(単数回答)

(エ) 本体に注意喚起の表示の有無

使用している(していた)抱っこひも等には、子供の転落防止に関して注意喚起表示が

あったかについては、54.9%が「覚えていない」と回答している。「本体に注意表示がついている」との回答は35.1%であった。

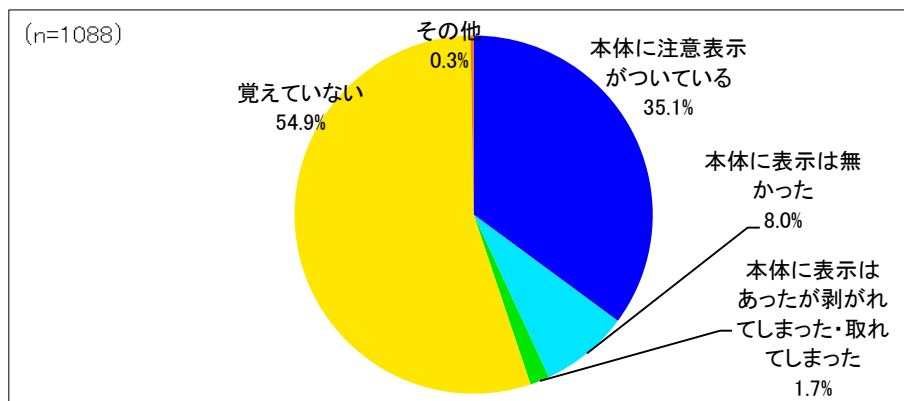


図 17 本体の注意喚起表示(単数回答)

(オ) 転落事故防止のために注意していること

抱っこひも等からの子供の転落事故を防止するために注意していることについては、「着脱は安全な場所で行う」54.0%、次いで「前かがみになる時は、手で支える」45.9%、「着脱は、低い姿勢で行う」43.4%となっており、着脱時・前かがみ時に注意をしている人が半数程度にとどまった。また、「片手を空けておく」12.8%、「緩みのないように毎回ベルトを調節する」18.6%などは、回答が10%台となっており、あまり注意がされていないといえる。

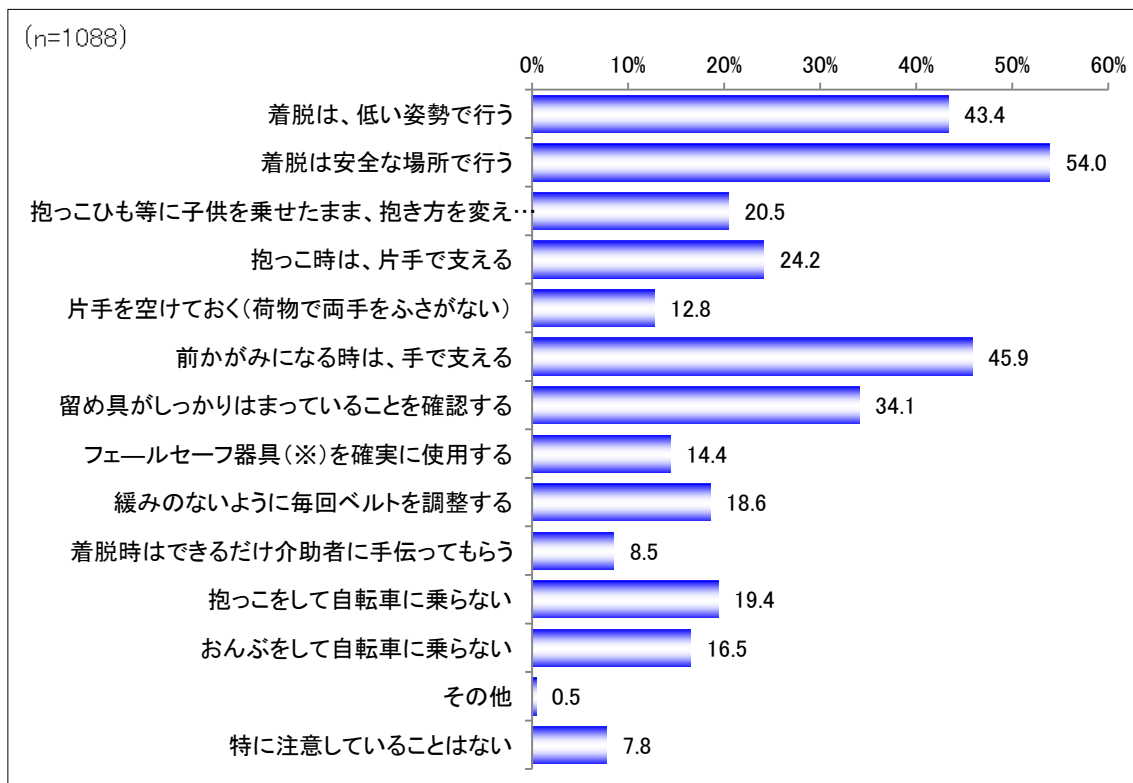


図 18 抱っこひも等からの転落事故防止のために注意していること(複数回答)

(※) フェールセーフ器具とは、万が一バックル等がはずれても、子供が落下しないための器具をいいます。ゴムベルト（安全ゴムループ）や、おんぶハーネス・ホールドカバーなどが該当します。

(カ) 着脱場所として安全と考える床材等

「万一、転落した際のことを考え、安全な場所での着脱が推奨されていますが、どのような床材等が安全と思われますか」との問いについては、「布団・ベッド」77.0%、次いで「ソファ」41.2%、「クッションマット」36.3%と回答している。

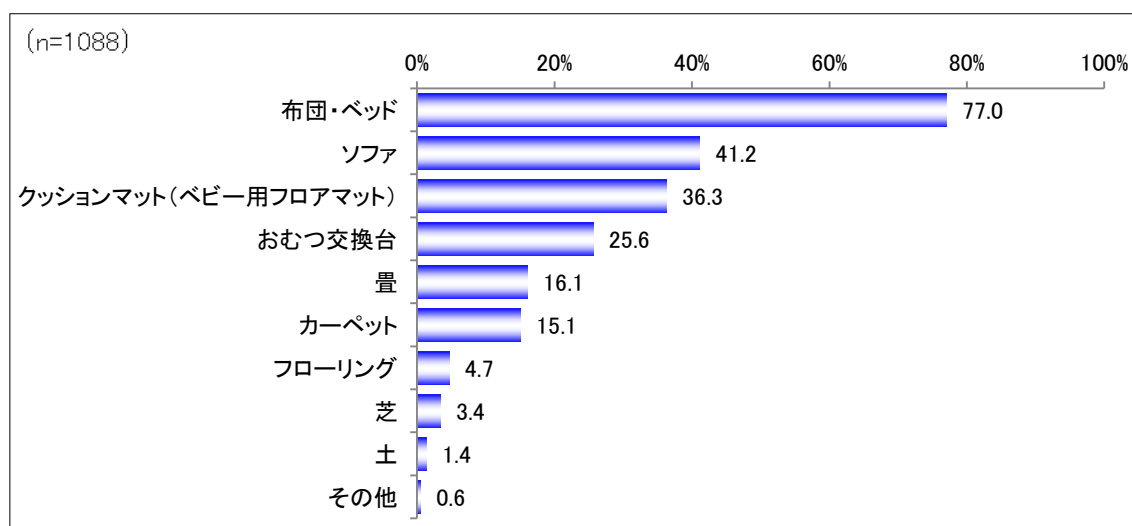


図 19 抱っこひも等の着脱場所として安全と考える床材等(複数回答)

ウ 抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験について

用語の定義

- ・「危害」経験とは
転落・転倒等して、ケガをした等の経験を指します。
- ・「危険」経験とは
転落・転倒等したが、ケガ等はしなかった経験を指します。
- ・「ヒヤリ・ハット」経験とは
転落・転倒しそうになる等して、ヒヤリとしたりハットとした経験を指します。

(ア) 抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験の有無

抱っこひも等を使用していて経験したことがある「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」については、全体の 34.9%が何らかの経験をしている。最も多いのは「子供を障害物にぶつけた」13.9%、次いで「子供が転落したことがある（しそうになったことがある）」13.8%となっている。

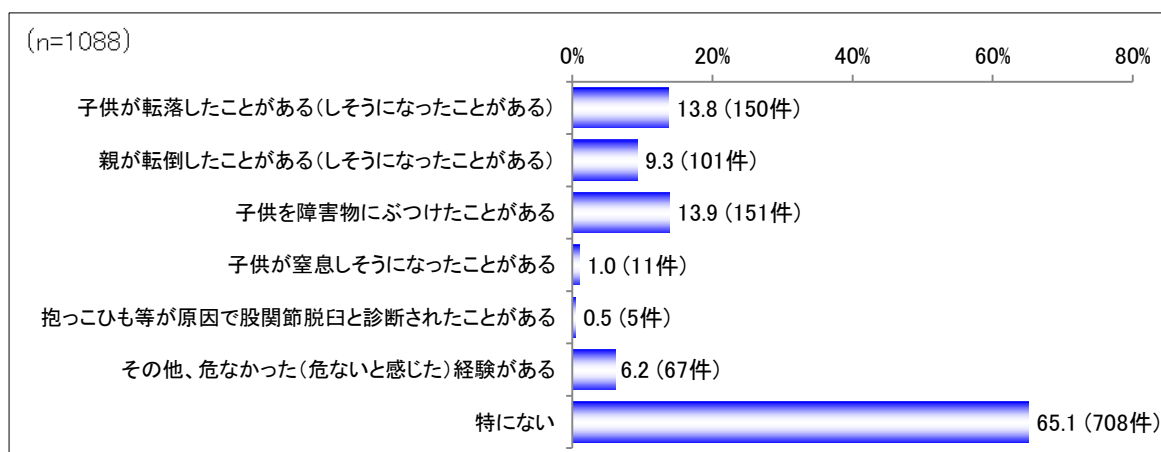


図 20 抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験(複数回答)

エ 抱っこひも等からの転落についての「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験

ここからは、前問で「子供が転落したことがある(しそうなったことがある)」と回答した 150 件 (13.8%) についての「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験を聞いている。

(ア) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験の程度

前問で「子供が転落したことがある(しそうなったことがある)」と回答した 150 件 (13.8%) を精査した結果、143 件について以下にまとめた³。(以降はこの 7 件を除いた 143 件で分析を行った。)

表 1 抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験

病院を受診した(入院あり) 【危害①】	0 件
病院を受診した(入院なし) 【危害②】 ※心配になり受診をしたが、ケガ等はなかった場合も含む	2 件
ケガをしたり具合が悪くなったりしたが病院を受診しなかった 【危害③】	2 件
転落したが、ケガはなく具合も悪くならなかった 【危険】	21 件
転落しそうなった 【ヒヤリ・ハット】	118 件
合計	143 件

(イ) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」発生時の子供の月齢

抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」発生時の子供の月齢は、「6 か月以上 12 か月未満」が 34.9%、「12 か月」が 19.6%、「13 か月以上 18 か月未満」が 12.6% となっており、比較的月齢の大きな子供の事例が多い。一方、首据わり前の「0 か月以上 4 か月未満」は 11.9%となっている。

³ 前問で「子供が転落したことがある(しそうなったことがある)」と回答した 150 件を精査し、記述内容が「転倒」または「障害物にぶつけた」に該当する 7 件を省いた。

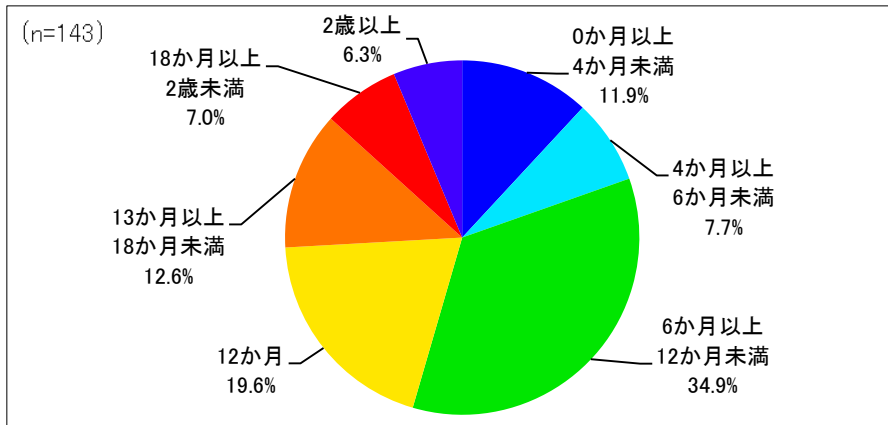


図 21 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」発生時の子供の月齢(単数回答)

(ウ) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」を経験した子供は第何子か

何人目の子供が抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」を経験したかについては、「第1子」が54.5%と多いが、「第2子」も38.5%と多い。

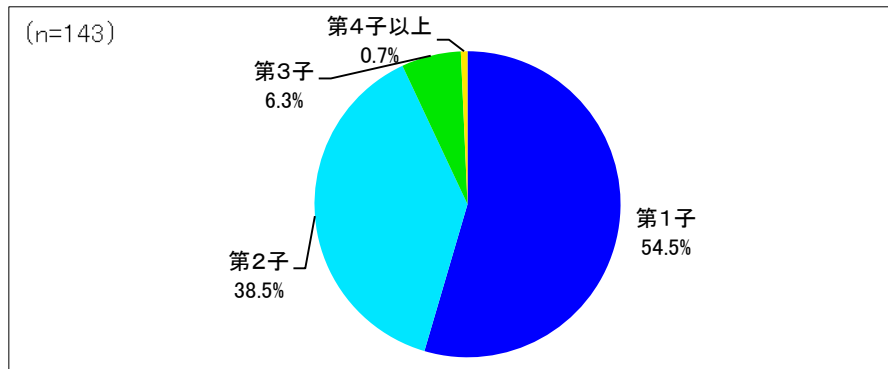


図 22 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」を経験した子供は第何子か(単数回答)

(エ) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験時の抱き方

「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」を経験した際の抱き方については、「縦対面抱っこ」が51.0%と最も多く、次いで「おんぶ」15.4%、「縦対面抱っこからおんぶなど、抱き方を変えるところだった」14.0%となっている。

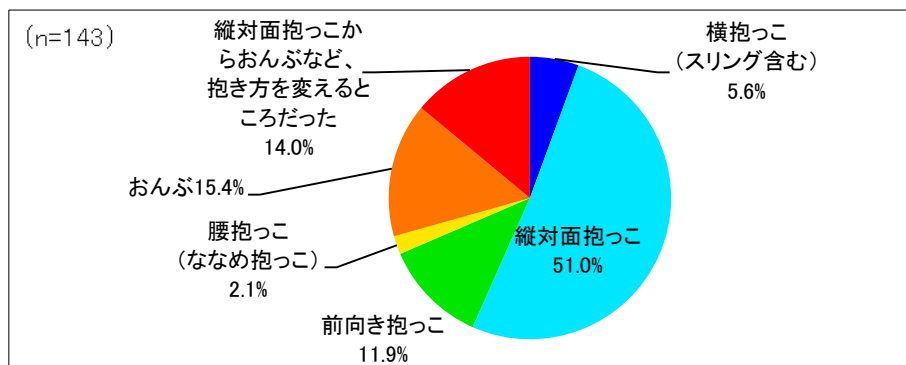


図 23 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験時の抱き方(単数回答)

実際に転落した 25 件では、「縦対面抱っこ」が 8 件、「おんぶ」が 7 件となっている。

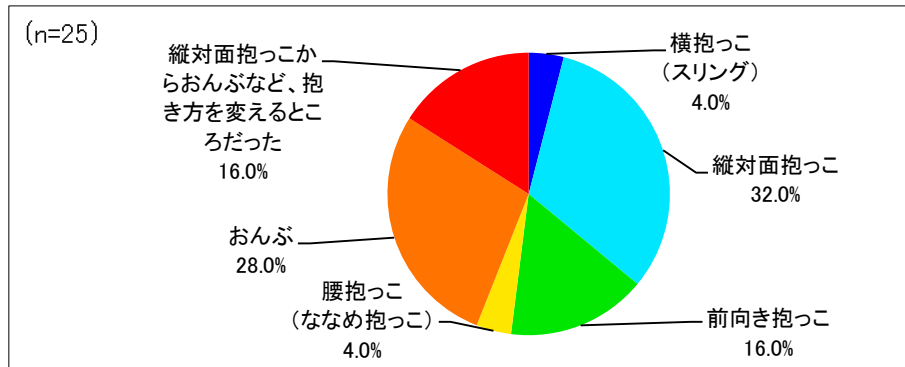


図 24 抱っこひも等における「危害」「危険」経験時の抱き方(単数回答)

(オ) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験時の状況

「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」を経験した際の状況については、「おんぶ・抱っこをすることであった」35.0%、次いで「子供のけぞったり、動き出したりしてしまった」23.8%、「前かがみや横まげなど無理な姿勢をした時だった」22.4%となっている。

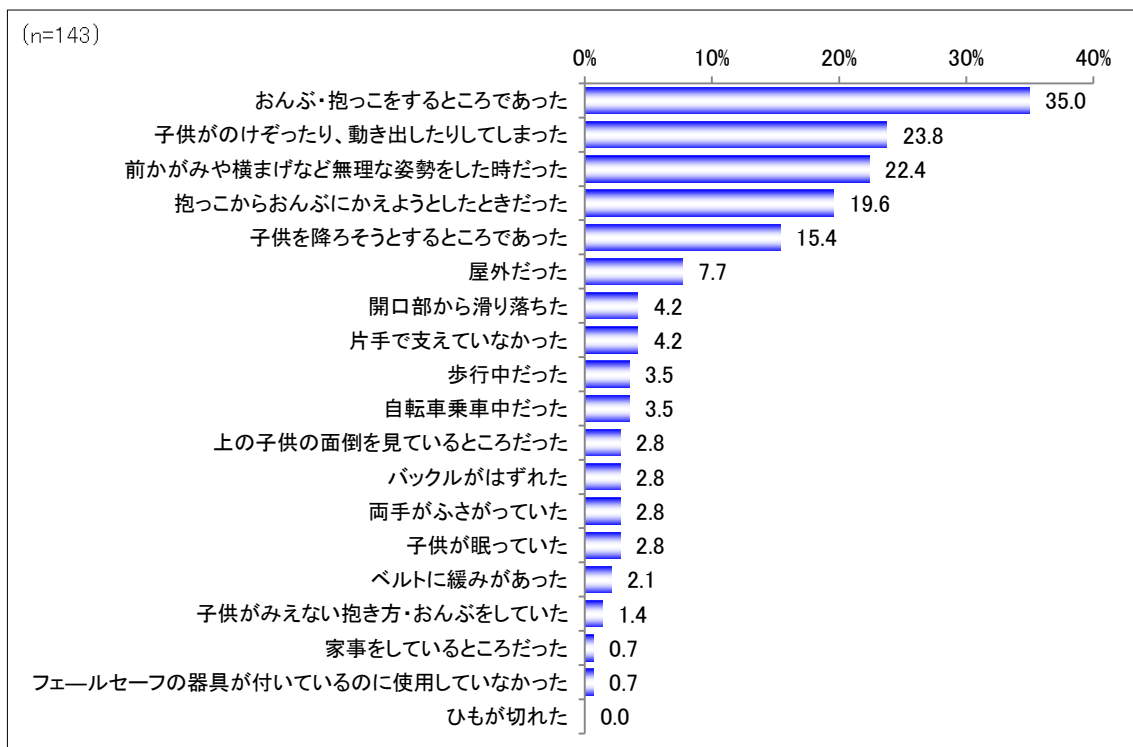


図 25 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験時の状況(複数回答)

(カ) 抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」の状況(自由記入)

抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」が発生した時の状況について、P.13に記載した【危害②】事例 2 件、【危害③】事例 2 件、【危険】事例 21 件のうち、状況について記述が得られたものについて、記述内容を抜粋する。

【危害②】(病院を受診した(入院なし))

- 肩にかける間に滑り落ちた。新生児用パットごと落ちた。一応受診したが、おでこに擦り傷程度であった。(0歳2か月)

【危険】(転落したが、ケガはなく具合も悪くならなかった)

- 店で買い物中。昼間。開口部よりずり落ちて下に落下したが、地面に衝突する寸前でつかむことができ、地面とはぶつからず。(0歳3か月)
- 4~5か月ごろ首がすわったのでおんぶに挑戦しようと思い家で動画のようにやってみましたが、背中にのせようとしたときや降ろそうとしたとき肩のあたりからすべり落ちるように落ちてきました。頭側から落ちましたが、布団のそばでおんぶしたのでクッションがわりになりました。私が思ったより勢いをつけておんぶしてしまったのかもしれない。慣れるまで少しかかりました。(0歳4か月)
- 家でおんぶを試みようと抱っこ紐を使ったとき、説明書を見ずに行ったため転落してしまいました。低い位置からの落下のため大丈夫だった。(0歳5か月)
- 出勤前、保育園への送迎時に、自転車に乗ろうとして、自転車の鍵を開けようと前かがみになったところ、鍵を地面に落としてしまったので、それを取るためにさらに前かがみになった。その際、抱っこひもの上部から子どもが抜け落ち、すぐに手で支えたが、自転車の一部に子どもの頭を当ててしまった。(0歳6か月)
- 対面抱っこをしたときに子どもが泣き叫んで暴れて、抱っこひもから抜けてしまいフローリングに頭から落ちてしまった。幸い座って抱っこひもを装着していたのと、早く気付いて体を押さえたため、頭を軽くぶつけただけで済んだ。その場ですごく泣いていたのと機嫌もすぐ良くなったので、医者には連れて行かなかったが、24時間は体調の変化がないか注意してみていた。(0歳8か月)
- 主人がつけた後でいつもよりも大きく緩めになっていたのに気付かず子供を抱っこひもに入れようとして大きすぎて落ちた。(12か月、前向き抱っこ)
- うまく肩ひもがかけられずに転落した(12か月、おんぶ装着時)
- 縦抱っこからおんぶしようとしているときに子供が暴れて落ちてしまった。自分や子供もまだおんぶひもに慣れていなかった時。低い体勢で自宅内だったので怪我はなかった。(1歳3か月)
- 肩ひもを外して抱き方を変えようとした際に、子供が動いたために転落した。(2歳0か月)

(キ)「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」が発生した原因

抱っこひも等における「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」が発生した原因については、そのほとんど(88.8%)が「保護者(親等)の不注意だった」と感じており、製品側に問題があったと考える人は少ない。

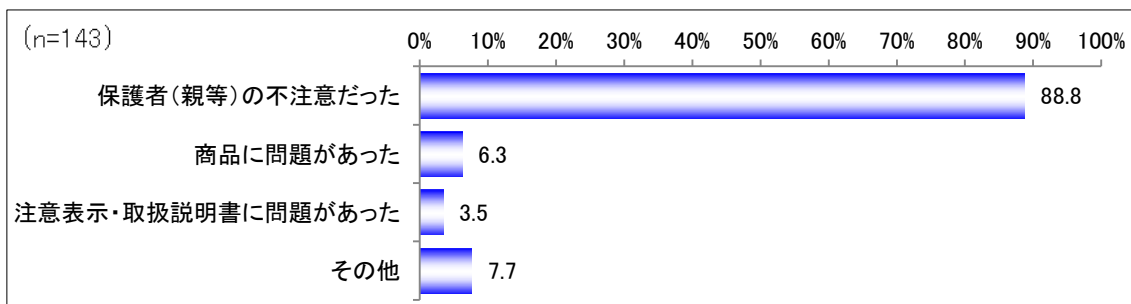


図 26 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」が発生した原因(複数回答)

(ク) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」発生時の報告の有無

抱っこひも等で危ない(と感じた)経験をしたあとに、どこかへ報告をしたかという問に対しては、ほとんど(96.5%)が「報告しなかった」と回答している。

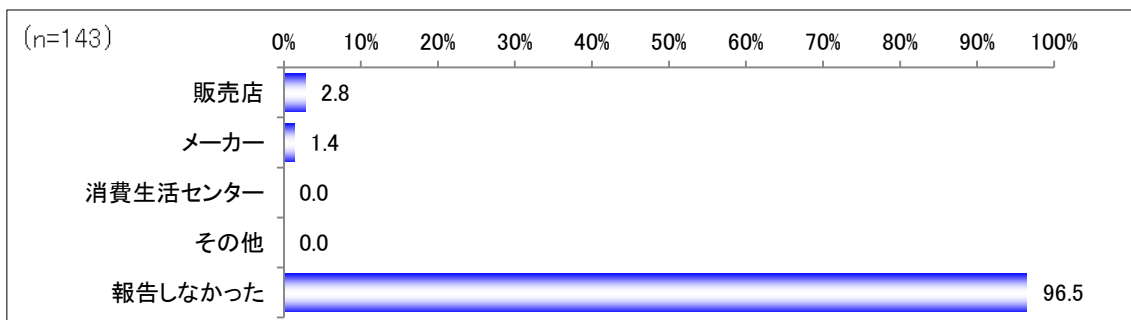


図 27 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」発生時の報告の有無(複数回答)

(ケ) 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験後の抱っこひも等の使い方の変化

経験後、抱っこひも等の使い方が変わったかという問については、66.4%が「より注意をするようになった」、21.7%が「特に変わらない」と回答している。

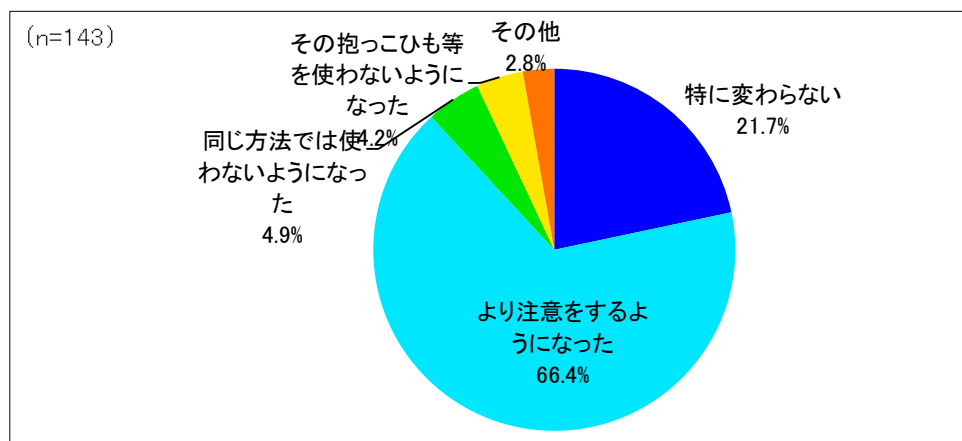


図 28 「危害」「危険」「ヒヤリ・ハット」経験後の抱っこひも等の使い方の変化(単数回答)

オ 抱っこひも等の安全性についての意見、行政やメーカー等への意見・要望等

抱っこひも等の安全性について感じたり考えたりしていること、行政やメーカー等への要望・意見等についての自由記述欄には、1,088人中464人の回答があった。記述内容の傾向は以下のとおりである。

(ア) 使用者の責任と考える

使う側が十分に注意して使えば問題ないとの意見が最も多く、87件あった。代表的な意見は以下のとおりである。

- あくまでも補助具としての認識を持って親が過信しないで使うことが必要と思う。
- 完全に安全な抱っこひもというのではないと思うので、使用者が気を付ければよいと思います。不具合のある製品はメーカーの責任ですが、それ以外は、取説やパッケージに注意書きをする程度でよいと思います。
- 使用する側が十分に注意すべき。親として当然の義務。
- 今の製品は親が無理な体勢をしたりしない限りは、まず事故は起きないように作られていると思う。メーカーの設計でも親がどんな想定外の姿勢をしても絶対に落下しない設計をするのは不可能だと思う。利用者側への情報発信・啓発を通じて、正しい使い方をするようにするのがベターだと思う。

(イ) 抱っこひもの構造に関する要望等

抱っこひもの構造に関する要望では、「前かがみになっても落ちないもの」「子供の足が障害物に当たらないような構造」「頭部が安定するもの」「暴れても落ちない構造」「ベルト調節がしやすいもの」など、安全性向上を望む意見がみられた(26件)。

- 私の使っていた抱っこひもには、転落防止ベルトのようなものがついていなかったもので、前かがみになったときが危なかったです。少し補助的なものがついていたらうれしいと思いました。
- 前かがみになっても落ちないような補助ベルトがあるといい。
- 子供が暴れても落ちないような構造にしてほしい。
- ひもの留め具を子供がいじって、取れそうになったことがあるので、留め具ではなく、他のデザインを考えてほしい。
- おんぶしているときに子供の足が壁などにぶつかる・引っかかることがあるので、カバーをつけるようにメーカーに伝えてほしい。
- 子供の頭を安全に固定できるようになっていると嬉しいです。

また、「おんぶしやすいもの(22件)」「着脱しやすいもの(21件)」「通気性の良いもの(16件)」「親の負担を軽減してほしい(13件)」「耐久性向上を望む(6件)」などの要望も多くみられた。

- おんぶの仕方が難しい。一人でやるときに後ろは見えないし、子供はじっとしていな

いし。もっと簡単に安全におんぶできるようにしてほしい。

- 抱っこからおんぶに回して変えるのが、転落不安で、私はあまりおんぶできなかった。何かもう少しやりやすい商品があれば…と思った。
- 通気性が弱く夏の熱中症が心配。
- 抱っこひもは、肩と腰への負担が大きく長時間の着用は厳しいと思うので、もっと負担を軽減できる構造を研究して欲しい。

(ウ) 取扱説明書等について

取扱説明書等については、「DVD やインターネットの動画があるといい (5 件)」「イラスト入りの分かりやすい説明書にしてほしい (5 件)」「使用方法を本体に記載してほしい」などの意見がみられた。

- 説明書だけでなく、DVD やインターネット動画での案内をしていただくと有効だと思います。
- 抱っこひもの内側（裏地）に注意書きが縫い付けられているといいかもしれません。
- もっと説明書に具体例をあげながら注意喚起をしてほしい。
- こんな時に事故が起こりやすいという事例の動画を使用 DVD に入れて欲しい。

海外製品の取扱説明書については、日本メーカーの製品よりわかりにくいといった意見が多かった。

- 海外メーカーの製品の場合にも、日本のメーカーのものと同じように見やすくわかりやすい説明書が欲しい。
- 海外製品に対する翻訳の正確さ。日本語が不足して理解しづらい商品もある。
- 海外のものは、取扱説明書がわかりにくい。海外の並行輸入品だと安いけど英語だから、さらにわかりにくい。

抱っこひもを試せる機会や講習会を望む意見もみられた。

- 抱っこひもでどんなことをしてはいけないのか、図説で書いてある紙を、母親学級などで配布したり、講習をしたりしてほしい。
- 講習等を積極的に行ってほしい。案内も積極的に。
- 購入の際に試せる機会・場所を増やして欲しい。

(I) 注意喚起について

メーカーや行政に対する要望として、以下のような意見がみられた。事故情報を開示してほしいという意見もある。

- 行政やメーカーは雑誌やテレビなどを通じて注意喚起を促すべきだ。
- 幼児雑誌等で注意喚起の広告をしてほしい。

- 危険性の具体例を本体に表記。
- 安全性について統一基準を設け、利用者にわかりやすくする。
- メーカーだけでなく、行政が安全基準等を作成するなど積極的に介入すべきだと思う
- 転落の危険があるということを、取扱説明書、CMなどで、もっと大々的に公表して、抱っこヒモを使用する保護者の注意を喚起してほしい。
- どのような事故があるのか原因も含めた動画を行政が制作して各販売サイトに載せて注意喚起。
- どんな事例があるのかをどんどん公表してほしいです。

(オ) その他の意見

自転車利用に関する意見も 12 件あり、抱っこひもでの自転車利用を危険視する意見が多かった。

- 抱っこひもやおんぶひもで自転車に乗っているママさんを最近よく見かけるが、安全面で疑問あり。
- 自分はやっていないが、抱っこひもで自転車に乗っている人を最近よく見かける件について。あれは万が一転倒などした時に赤ちゃんが大怪我をしそうなので、禁止事項としてメーカーや行政が明記したほうがいいのではないかと思う。

また、「着脱場所が増えるといい (6 件)」や「介助者がいるといい (5 件)」などの意見もみられた。

- いろんなところに子供の抱っこひもを着脱、やり直しできるスペースがあると良い。
- 公共の場所で、もっと赤ちゃん用のベッドがほしい。おんぶをするときに気軽に介助してくれる人がいるとありがたい。

その他少数意見としては、「模倣品を取り締まってほしい (4 件)」「無償修理、助成を望む (4 件)」などがあつた。さらに、以下のような意見もあつた。

- メーカーによって使用方法が異なるのは危険。
- 人によっては肩ひもをリュックサックのようにかなり緩くしている人をみかけるが、その分子供が安定性に欠け横からすべり落ちてしまいそう、首など引っかかってぶら下がってしまいそうで見ていて怖い。
- 注意事項欄に「危険だからしゃがんだり立ったりするな。下に落ちたものを拾うな」という趣旨の注意書きが書いてありましたが、背負ってあやすだけのための道具ならたぶん使わないです。ある程度動き回る前提で作ってほしいと思います。